

極東勤労者大会日本代議員団採択綱領

岩村 登志夫

解題

一九二二年一月、モスクワの極東勤労者大会において日本代議員団によって採択された綱領が、前年四月の山川均ら起草の日本共産党宣言と、二二年十一月のコミンテルン第四回大会採択の日本共産党綱領草案との中間に位置することは、訳者の旧著『コミンテルンと日本共産党の成立』（一九七七年刊）でも明らかにしたところであるが、松尾尊允氏の強いお奨めもあって、ここに右綱領の試訳をお目にかけることにした。文書の性格上、しかるべき訳者を得ての定訳が当然、期待されるが、旧著の読者各位からのご要望も考慮の末、拙訳を以てあえて研究者、一般読者の便宜に供する次第である。

なお、本訳稿の底本については、伊藤秀一氏のご好意あふれるお取計らいで閲覧の機会に恵まれたものであること、また、その複写・製本などにかんしては、古屋哲夫氏に温かいご配慮をいただいたものであることを、とくに付記しておかねばならない。

極東勤労者大会の速記録など基本文書は、ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所中央党文書館^{フセリフ} Центра-льный партийный архив Института марксизма-ленинизма при ЦК КПСС—ЦПА ИМЛ に現存する。ソ連邦の歴史家、ゲ・ゼ・ソルキン氏 Sorkin Г. З. はソ連邦科学アカデミー・アジアアフリカ諸民族研究所紀要『東方学の諸問題』一九六〇年第五号《Проблемы востоковедения》, 1960, No. 5. に研究ノート「極東諸民族大会」Съезд народов Дальнего Востока. を

執筆するにさいして、右文書館所蔵の大会速記録ファイルを基本史料としている。ソルキン氏には、一九二〇年九月のバクーの東方民族大会を分析した著作『第一回東方諸民族大会』（モスクワ、一九六一年刊）《Первый съезд Народов Востока》, Москва, 1961. が別にあるが、右文書館所蔵史料がそこでもふんだんに使用されている。

ところで、ソルキン氏は、『東方学の諸問題』一九六〇年第五号論文において、極東勤労者大会の名称・開催期間・任務にかんして一連の訛伝が流布する事情に言及し、大会準備が長期にわたり、その上、いくつもの委員会が関与するところとなったことのほか、「これを助長したものに、大会速記録（ついでながら、これは完全に保管されているのであるが）が出版されることなく、発行された文書集『第一回極東革命的諸組織大会』（ペトログラード、一九二二年刊）にも、大会資料の収録は一部にとどまったという事情もあった」と指摘している。氏の次のような付言は、もっともなものである。

「大会にかんして後になって現われた個々の所説は、往々にして、記録との照合もなく、相互に複雑にいろいろござるこの当時のできごとの積極的な参加者たちの個人的な回想録にもっぱら依拠するものであった。したがって、このような回想録では、

事実の叙述に不正確さ、くいちがいがあられるのも、ふしぎではない。」

日本の研究者もまた、訳者もふくめて、ソルキン氏の指摘する極東勤労者大会の基本史料の欠如に悩まされてきたし、状況はいまも、さほど好転していない。モスクワの文書館利用の便宜が与えられないかぎり、既刊の大会文書集三点の照合によっても、隘路がぎりひらかれるなどは考えられない。

すなわち、ソルキン氏にしたがえば、『第一回極東勤労者大会』（ペトログラード、一九二二年刊）《The First Congress of the Toilers of the Far East》, Petrograd, 1922. 「高屋定國・辻野功訳『極東勤労者大会』一九七〇年刊」も、その「実質的な翻訳協力者」山極晃氏のいう「正式の議事録」とはみなしがたいし、『第一回極東共産主義的革命的諸組織大会』（ハンブルグ、一九二二年刊）《Der Erste Kongress der kommunistischen und revolutionären Organisationen des Fernen Ostens》, Hamburg, 1922. 4th 版、らうまでもなく、『第一回極東革命的諸組織大会』（ペトログラード、一九二二年刊）《Первый съезд революционных организаций Дальнего Востока》, Петроград, 1922. さえも、大会資料を一部収録するにすぎない。

しかしながら、当面、これら公刊文書集三点（英文のもの）

かりにそう称する）の比較照合が大会諸報告の正しい理解をたすけてくれるものであることは、訳者も別の機会にサフ・フロフ・片山両報告について例示したところであり、とりわけ、ここに訳出紹介する日本代議員団採択綱領は、右文書集三点のうち、ロシア語で刊行された『第一回極東革命的諸組織大会』一四七—一五二ページにのみ収録され、極東勤労者大会の意義を考察する上にもきわめて重要な史料となることは、うたがいない。

ところで、ソルキン氏は、前掲『東方学の諸問題』論文で、極東勤労者大会には十種類をこえる呼称があるとしながらも、「コミンテルン執行委員会の大会についての基本的諸文書の表記にも、大会の性格にも適合する、最も正しい名称は、Съезд народов Дальнего Востока と考えられる」といふ。

ソルキン氏の前掲モノグラフィーによれば、一九二〇年のバックーの Первый съезд народов Востока への正式名称とは別に三通りの呼称があったとされる。この場合は、正式呼称を付した大会議事録ならびに機関誌が刊行されているわけであるから、極東勤労者大会の呼称の混乱も、ソルキン氏のように大会議事録の未公開に一因を求めめるのは、いささかむりがありそうである。

前掲『東方学の諸問題』ソルキン論文の英文梗概は、一九二〇

年九月バクー大会に the First Congress of the Peoples of the East、一九二二年一月モスクワ大会にも the Congress of the Peoples of the Far East の表記が用いられてゐる。

すなわち、両大会の正式呼称、もしくは最も適切な名称には、いずれも съезд народов; the Congress of the Peoples of the Far East による表記が共通し、съезд нации; the Congress of the Nations の字句はあえて避けられたとみられるわけである。

ロシア語の народ は、どうせでもなく племя (部族)・народность (民族体——部族と民族との中間に位置する範疇)・нация (民族) と народные массы (人民大衆) との両義がある。英語の people、独語の Volk もまた両義を兼ねそなえる。ところが、日本語・朝鮮語・中国語では、民族・민족と、人民・인민 とに截然と区分され、わずかに対訳が両義を備える。国民・국민に人民の語義までも求めるわけにはいけません。張秋白の極東勤労者大会報告は、彼が代表する国民党の字義を National Party; Национальная Партия と明示する。

漢字文化圏およびそれから派生した東アジア諸国で、народ; people; Volk に相当する語彙がなにかぎり、その翻訳には「民族・人民」と単語を重ねて代用するか、もしくは「民族」・「人民」のいずれか片方の語句を当ててすまますほかない。現に、『東方学

の諸問題』一九六〇年第五号巻末の英文目次にあるソルキン論文の表題は、Congress of Peoples of the Far East であるが、中国文目次には遠東各民族代表大会と表記されている。

極東勤労者大会（極東民族大会）の名称にもりこまれている Народы；peoples；Völker のことだが、中国・朝鮮・日本・モンゴル・ブリヤート（ソ連邦を構成する西部ブリヤート、および極東共和国を構成する東部ブリヤート）・インドネシア・インドナその他東アジア諸国に包括的に適用できる表現であったことは、『極東諸民族』一九二一年第四号《Народы Дальнего Востока》，№ 4, 15 октября 1921, Иркутск. в Коминтерн ン執行委員会極東書記局の名で発表された大会開催よびかけの文書にも確かめるところであり、大会宣言その他の大会諸報告・諸文書では、もちろんそうである。

これら諸文書・諸報告の用例に照らして、Народы；peoples；Völker の表現は、中国・朝鮮・インドネシア・インドシナ諸国・ソ連邦（極東諸自治州）・モンゴル・極東共和国、および日本の三グループのそれぞれに応じて多義的に理解されるべきもののようにである。しかも、すくなくとも日中兩國には、これにふさわしい訳語を欠くかぎり、中国で遠東各民族代表大会と表現されるように、日本では極東勤労者大会（字義どおりには極東諸国民

大会）の表記がゆるぎをもち。

片山潜は大会直後の Коминтерн 機関誌《In-Pre-Comm》，24 Feb. 1922, Berlin. での The Congress of the Far Eastern Peoples と表現し、六年後にデ・ハートロフスキー編『共産主義インタナショナルの諸党』（モスクワ・レニングラード、一九二八年刊）Петровский Д. (ред.)《Партии коммунистического интернационала》，М.-Л., 1928. での日本共産党小史を綴るにちよとして、極東勤労人民大会 Конгресс трудящихся народов Востока（極東 Дальнего の文字が原文には脱漏）の呼称を用いる。露文大会文書集の婦人会採扱マニュアルの Женская секция Съезда Трудящихся Народов Дальнего Востока の名で発表されている。田口運藏の回想には極東人民大会とある。張國燾は遠東被压迫民族大会が労働人民に改称したかにいう。

一九二二年一月三〇日の大会本会議で採扱をみた決議文「ワシントン会議の総決算と極東の情勢——シノヴィエフ報告にかんする決議——」は、大会文書集三点のいずれにも収録されるが、片山潜『反戦平和のために』（一九五四年刊）にも再録されるが、末尾の次のくだりは、大会呼称にかかわって重視されてよ。

英文——The true road to the freedom and independence of the oppressed peoples of the Far East lies through the

union of the toiling masses [of the Far East with the proletariats of the advanced countries —— 原文脱漏] and with them only, against all imperialists. (p. 215.)

独文——Der richtige Weg zur Freiheit und Unabhängigkeit der unterdrückten Nationen des Fernen Ostens führt über den Bund der werktätigen Massen der Völker des Fernen Ostens mit dem Proletariat der vorgeschrittenen Länder — und nur mit ihm — zum Kampf gegen alle Imperialisten. (S. 124.)

露文——Действительный путь к свободе и независимости угнетенных наций Дальнего Востока лежит через союз трудящихся масс дальневосточных народов с пролетариатом передовых стран, и только с ним, против всех империалистов. (стр. 75.)

ちなみに、前掲『反戦平和のために』は『片山潜は叫ぶ——帝國主義戦争反対の陣頭に』（モスクワ、一九三五年刊）の再刊であるが、その日本語訳は次のとおり。「極東の被抑圧人民の自由と独立への唯一の道は、極東の勤労人民大衆と先進国のプロレタリアートとの、帝國主義に反対する同盟である」（四二二ページ）。日本語訳の冒頭の「極東の被抑圧人民」が、英文テキストの

the oppressed peoples の誤訳であることは、独露文テキストの die unterdrückten Nationen; угнетенные нации の表現に照らして、一目瞭然である。日本語訳のその次の箇所「極東の勤労人民大衆」という表現は、ほぼ英独露文各テキストと一致する。決議文のこのくだりは、peoples; Völker; народы の言葉が両義を兼ね備えることをよく示してくる。

大会呼称をめぐる一見、訓話学的な詮索も、世界革命運動をになう社会主義諸国民、資本主義諸国民（抑圧民族）及び被抑圧民族の三要素についての認識にかかわるものであることは、どうやら見過されてきたようである。いわゆる極東民族大会が、ここに紹介する文書「日本における共産党員の任務、日本代議員団採択綱領」Задачи коммунистов в Японии. Программа, принятая японской делегацией. を残したゆえんも、そのような側面を抜きにしては考えられまい。大会が日本革命運動の役割の過大視、朝鮮・中国民族解放闘争の相対的軽視という偏向に陥ったとする訳者の旧説は、変えるものではないが、日・朝・中三國の peoples; Völker; народы (人民・民族) の国際連帯がはかられ、このなかで日本共産党員の任務にかんする綱領が採択されたという事実は、やはり正当に評価されるべきである。

徳田球一の三・一五事件予審問調査、ならびに高瀬清・渡辺

春男の回想記からは、大会本会議と並行して、日本問題分科会がサファロフ・片山らの指導のもとに開催され、その終了にあたって、ブハーリン提案の文書を「日本代議員団採択綱領」として決定したものである。この文書がブハーリン一人の起草と考

えてはならないことは、注記した農家構成の数値の誤記などからも、たしかである。前記の片山起草の大会決議文と同様にブハーリンのほか、コミンテルン極東書記局日本部を構成していたと推定されるヴォイチンスキー、エムゲ、片山、シュミヤツキー、田口、とりわけサファロフらの共同労作とみなすべきであろう。

極東勤労者大会の日本代議員団による綱領採択は、このような起草経過をたどったものとすれば、半年後の一九二二年六月のコミンテルン第二回拡大執行委員会総会における日本共産党綱領規約特別委員会の編成をへて、日本共産党綱領草案を準備するものとなったと考えてよい。

しかしながら、徳田の供述、あるいは、これに触発された形跡のある高瀬の回想が極東勤労者大会の綱領的文書をさして日本共産党綱領草案の基調をなすものとする点は、信ずるにたらない。

右の日本共産党綱領規約特別委員会設置の必然性も、これでは理解しがたい。犬丸義一氏が、高瀬回想録のこのくだりに言及して「正式議事録が伝えていない、しかも後の日本共産党綱領草案の

作成につながる重要な事実」と解題する点にかんしていえば、正式議事録なるものについてはしばらくおくとしても、氏の評価は綱領的文書の作成という事実に限定されるべきものであって、文書の内容にまで及ぼされてはなるまい。

徳田の供述、高瀬の回想が極東勤労者大会においてブハーリンから提示された綱領的文書は五項目のスローガンの冒頭に「天皇の廃止」を掲げるものであったとする点についていえば、たしかに、一九二二年一月二六日の大会本会議において、サファロフは「極東における植民地問題と民族解放闘争」と題して報告し、日本については「労働者階級に対して、諸君は天皇、軍部、財閥の打倒をふみこえて社会革命へ前進しなければならない」と語りかけるものである」と断言している（英文のものは、独露両国語のものと同照すればはつきりするとおり、「財閥」*plutocracy* が「偽善」*hypocrisy* と誤記されている）。

高瀬の回想のうち、綱領的文書の内容にわたる部分は、徳田の供述をそのまま借用したふしがあるが、その前後には、次のような叙述が付加されている。

分科会がいよいよ終了するという日であった。サファロフはブハーリンを伴って日本本部会に出席してきた。いつものように片山老を中心に協議は進められていったが、この時ブハーリン

より示されたものは日本共産党の綱領草案のノートであった。

……この時われわれ一同のあいだでは「天皇の廃止」の問題についてドキンとくるものがあつた。片山老はこの点をいとも易々とうけいれておられたが、吉田君と私は顔を見合わせて緊張する一場面であつた。徳田君は例の大ザツパな性格から、「その心配せんでもいいじゃないか！」と、こともなげにいい放つていた。アメリカ經由の日本人たちは、この問題についての日本内地の空気にはまったく不感症であつた。説明しようにも説明だけでは理解できないものがあつた。（高瀬清『日本共産党創立史話』一九七八年刊、五六―五七ページ）

高瀬の回想する片山の天皇制問題のとり扱いについては、『近藤栄蔵自伝』（一九七〇年刊）巻末の座談会記事では、コミンテルン第四回大会において、片山は日本代議員に帰国後の慎重な検討を求めたという、高瀬の発言が記載されていて、高瀬の回想のこの部分は潤色のおいが強い。しかし、もつとも重要な点は、訳者の旧稿でも明らかにしたとおり、片山も、サファロフも天皇制・軍部の財閥からの相対的独自性の認識に欠け、したがって普通選挙運動に対する正当な方針を提示するまでになつていなかつたにもかかわらず、「天皇、軍部、財閥の打倒」というサファロフ（したがって、おそらくプーリン）の表現に日本の一部代議

員が幻惑され、色めきだつたということであろう。

サファロフがロシア革命の「民主共和制」のスローガンを念頭においていたことは、注記したとおりであり、モンゴール、極東共和国の議会ばかりか君主も許容する人民民主主義^{ポロジツケン}非ソヴェト権力形態は、日本革命の前途に構想されるべきものではなかつた。

プーリンについては、彼がコミンテルン第四回大会にいたつてようやく、コミンテルン綱領にも各国共産党綱領にも過渡的・部分的諸要求は掲げるべきでないとする自己の見解を撤回することは、今ではよく知られている。また、プーリンに限らず、コミンテルン首脳が普通選挙法に基づく議会制民主主義に積極的意義を賦与するのは、一九二二年六月のコミンテルン第二回拡大執行委員会総会前後に属し、第四回大会の労働者政府の提起をまたずして、極東勤労者大会で普通選挙運動に肯定的評価をころみながら、たちどころに社会民主主義者の烙印を甘受せねばならなかつたであろう。したがって、ましてや極東勤労者大会日本問題分科会のプーリンが、かりに日本における普通選挙運動の積極的意義を認めていたとしても（このこと自体ありえないが）、徳田供述、高瀬回想録のように、当面の政治スローガンに「天皇の廃止」に次いで「普通選挙権の獲得」「言論、集会、出版、結社の自由」を掲げるように指示する気遣いはなかつた。とりわけ、経済政策の

「高度の累進所得税の賦課」は、労働者政府の任務と切離しては首肯できない。中印両国の統一戦線政府の提起もこれに酷似する。

蛇足になるが、ソ連邦の研究者の間では、ア・ペ・コゾロヴィツカヤ女史 Козовицкая А. В. は早くソ連邦科学アカデミー東方学研究所学術報告第二三冊『日本（歴史の諸問題）』（モスクワ、一九五九年刊）《Япония (Вопросы истории)》, М., 1959. に論文「第一次世界戦争後の日本における労働運動、社会主義運動（一九一七—一九二三年）」Рабочее и социалистическое движение в Японии после первой мировой войны (1917-1923 г.г.) を執筆して、露文大会文書集二五〇—二五一ページから綱領の一節「現実には、日本における大衆的共産主義政党は、……日本プロレタリアートが国内において決定的な革命勢力となる第一条件である」（本訳稿一四六ページ）を引用し、極東勤労者大会が日本共産党結成に及ぼす重要な意義を力説したことがある。

女史は、自著『日本労働者階級統一をめざすたたかい（一九二四—二八年）』（モスクワ、一九六二年刊）《Борьба за единство рабочего класса Японии (1924-1928 гг.)》, М., 1962. にも、同趣旨の部分を再録している。女史は、これらで一九二二年七月十五日の日本共産党創立大会に言及し、「大会は組織として、党結成の手続きをとり、中央委員会を選出して、党綱領作成をゆ

だねた」と述べている。

女史は、極東勤労者大会のものについては платформа 日本共産党創立大会選出中央委員会に作成が委ねられたものについては программа と、綱領に当たるロシア語の語彙を使いわけているが、後者の программа は、コミンテルン第四回大会のもの表記に用いられるものである。

荒畑寒村、山川均の回想にも、高瀬、徳田がモスクワから日本共産党結成の指令を持ち帰ったとあるが、徳田の供述には、一九二二年七月一五日の日本共産党創立大会と党綱領作成作業との関係にかんする次のようなくだりが見出される。

次ニ党ノ綱領ニ付テデアリマスガ、之ハ私達ガ齊ラシタ極東民族大会ニ於テ支持サレタ既述ノ内容ヲ充分討論シ決定スル事ガ出来ズ、何レ此創立大会後直チニ派遣サルル「コミンターン」第四回大会ヘノ代表ノ帰国ヲ待ツト云フ事ニナリマシタ。

（山辺健太郎編『現代史資料』第二〇巻、一九六八年刊、七四ページ）

極東勤労者大会の綱領が迎った運命について、コゾロヴィツカヤ女史の叙述は、徳田供述と符節するものがあるといえよう。

ところが、前掲『東方学の諸問題』一九六〇年第五号ソルキン論文は、極東勤労者大会に指導的役割を演じたジノヴィエフ、ブ

ハーリン、サファロフらには全く触れず、また、大会が一九二二年七月の共産党結成に果たした大きい役割を力説しておきながら、日本代議員団採択綱領の存在は完全に黙殺している。

ソ連邦科学アカデミー・アジア諸民族研究所などの名で刊行された『日本文献目録』（モスクワ、一九六〇年刊）『Восточная-Финляндия』, М., 1960. また、極東勤労者大会日本代議員団綱領を脱漏させている。これには、日本共産党綱領草案も落とされている。前掲『極東諸民族』一九二一年第四号所載の日本共産党宣言・日本共産党規約の両文書は登載されているだけに、しかも、コゾロヴィツカヤ論文がすでに発表されていただけに、この欠落は奇異の感を免れない。訳者の旧著は、これを「不用意にも欠落」と表現しておいたが、この『日本文献目録』には、ジノヴィエフ、ブハーリン、ラデック、サファロフらのものはいっさい収録されていない。極東勤労者大会日本代議員団採択綱領がブハーリンないしサファロフによって起草された可能性は、コミンテルン第四回大会の日本共産党綱領草案のばあいのブハーリンと同程度に、考えられてよいかもしれない。

極東勤労者大会の呼称、ならびに民主共和制のスローガンが有する意義などに触れて、解題に代える次第である。

日本における共産党員の任務

日本代議員団採択綱領

一、日本は、住民が一人のこらず読み書きができて、五千万人の住民のうちに約五十万人のプロレタリアと五百万人の零細小作農^{ペイトー}半日傭農を算える、非常に急速に発達した資本主義のくにであるにもかかわらず、大土地所有制は、それから出てきた軍部、元老をとまないとつづいて、このくにの政治生活に指導的役割をなお果たしつづけており、そのさい、エセ立憲主義的諸形態（天皇大権と軍事的^二金権的元老寡頭制独裁とのもとの極度の制限選挙制、^二院制）によってカモフラージュされた天皇制に依拠しており、軍閥の独自の地位に依拠している。陸海軍におけるたえざる軍備〔増強〕を必要とする略奪的植民地政策は、日本のブルジョアジーを大土地所有制および軍部とある程度まで結びつけた。この五十年間にわたって、日本の政治舞台は、ふたつのグループ、大陸侵略政策を押しとおしてきている陸軍「長州閥」と、日本の太平洋における海上覇権を狙っている海軍「薩閥」とのあいだで、おもにあらそわれてきた。現在の政友会・憲政会両党の区分も、同一線上のものである。すなわち、大地主と軍部が、領土獲得をとりわけ利益とし、そこでは、かれらは被征服諸国の農業植民地

化、略奪的経営においてみずからの採算をはかっているのに対して、ブルジョアジーは、外国との競争、国際的な経済上のあらそいにおいて最も重要な場所を確保しようとしている。国民党は、^(訳注) どんぞこの海運業者グループにすぎず、支配階級の独立した分派にはなっていない。

これら諸政党が遂行し支持している帝国主義的政策が、極東諸国間の正常な経済関係を不可能なものにしているかぎり、広範な人民大衆の利益に対して、これら諸政党はすべて、明確に敵対している。この帝国主義的政策は、日本人民を絶えず戦争の脅威にさらし、過大な軍事税の重荷をその肩に負わせて（日本の予算の五〇%ないし七〇%が軍事費からなりたっている）、日本の勤労大衆を野蛮な隷屬化に導くというかたちで、日本の経済発展に悪影響を及ぼしている。

日本列島が絶対的に人口過剰であって、土地が不足しているという日本帝国主義者の主張は、帝国主義的野望を欺瞞的にカモフラージュして、人民大衆の注意を侵略政策の方へそらせようとする手にすぎない。事実、朝鮮および南満洲の例が証明しているところでは、これらの奪取のほんとうの意味は、日本の労働者に比べてよりごのみが少なくて自己の労働力を安く売る現地労働者大衆を搾取することにある。

日本国内では、労働者階級の自主的活動のいかなる発露も、支配階級のテロルによってきびしく抑圧されている。日本の労働者は、他のブルジョア国家では労働者が享有しているようなわずかばかりの市民権さえも与えられていない。かれらは、団結の自由を奪われている。自己の切実な経済的利益のためにたたかうどのような合法的可能性も、かれらには、与えられていない。与党政友会が行なっている農村における寄生大地主制の独裁は、まだ限りないものである。どんなブルジョア急進運動すらも、きびしい弾圧にあっている。こうして、日本帝国主義の反革命的抑圧政策は、発展の豊かな可能性を前にしている日本人民にとっても、抑圧政策によって直接に痛めつけられている朝鮮・中国の勤労大衆にくらべて、安くつくわけのものではない。

二、現在、日本資本主義は、みずからにとって好都合な「戦争景気」の終結とともにひき起こされた過剰生産恐慌にあっている。日本の外国貿易は、欧米との競争にさらされて破局的に低下している。

ワシントンにおける四か国条約の調印は、日本を、極東共和国およびソヴェト・ロシアに対する攻撃に端を発する新たな軍事的冒険のみにかりたてた。

しかし、日本帝国主義はこのようなみちによって、このくにの

経済的安定の回復をはかることはけつしてできない。生産力を根本から破壊している龐大な軍事費は、極度にせばめられた国内市場の購買力を高めうるものではない。新たな領土獲得の望みも、外国市場の確保をもちとらさずとはかぎっていない。中国支配をめぐる国際帝国主義競争があまりにも尖鋭化して、日本帝国主義は、そこで自己の計画を完全には実行できなかつたほどである。極東全域で、日本帝国主義がひき起こしたものは、日本帝国主義のすべてに対する当然の全般の憎悪にすぎなかつた（一九一九年三月の朝鮮における革命的爆発、一九二〇年の間島における蜂起、一九二〇年の日本商品ポイコット、中国における抗日デモなど）。

日本の勤労大衆は、みずからの政治的経済的解放をめざすたかに、日本帝国主義の危機を利用して、直接にこれを役立てた。一九一八年の米騒動は、日本の被抑圧、被搾取勤労大衆にどれほど尽きることのない革命的エネルギーの貯えが蓄積されたかを示した。益々、支配階級の帝国主義的政策は、さげがたい帝国主義世界戦争、新たな数百万人の勤労者の戦死、国民経済の完全な破壊に導いている。日本帝国主義は、日本のプロレタリアート、日本の勤労大衆の壮大な未来を前に墓穴を掘っている。

三、日本に特徴的なことには、一方では、プロレタリアートが異常に急速に増加し、他方では、その階級構成は一様でなくて、

その大部分が農村と分ちがたく結びついている。一八七〇年代を起点とする日本資本主義発展は、一九一四—一九一九年の戦時好況期に頂点に達し、この時期に、日本の工業の大部分が完全に設備更新されて、既存の家内工業を併呑した。戦時中に、日本の労働者階級は人員が二五%以上もふえた。（訳注²）

日本のプロレタリアートの約五〇%を構成しているのは、通常、三、四年工場にとどまった後は農村に戻る婦人労働者である。

労働者のあいだのちよつとした自主的活動のあらわれも迫害してきた支配階級のきびしいテロル、ならびに日本の労働者の後進性の結果、日本において初めのうちは労働者階級の経済的組織の指導権は、「労資協調」の旗じるしのもとに活動する自由主義ブルジョアの知識人（鈴木とその一派）の手に落ちた。最近四年間にはじめて、労働運動の急進的階級の一翼が労働組合に組織されるにいたつた。自由主義的協調主義的首領たちはこれまで日本のプロレタリアートをその先進的分子からなる独自政党結成のいかなるころみからもうまくへだててきただけに、その当然の結果として、日本プロレタリアートの最良の部分にアナルコ・サンジカリズムの気分を高めることになった。日本の労働者の最大の労働組合組織、友愛会は、労働者階級の十分の一を包括しているどころか、全国的規模における有効な労働組合センターにもな

っていない。多くの労働組合がギルド主義の思想的組織の残滓からいままなお解放されていない（例えば、欧文と邦文との二つの印刷工組合の存在）。そして、日本プロレタリアートは経済闘争の武器をなおもたないように、革命的政策の道具も持たずにいた。

日本の労働者階級のもっとも革命的な分子の仲間におけるアナキズム、サンジカリズムへの漠然とした共鳴の態度は、広範な労働者大衆の消極性、無自覚の派生物にすぎず、結果にすぎない。

いまのところ、まだ党員の少ない若い日本共産党も、無政府共産主義系、サンジカリズム系の革命的労働者組織も、ばらばらの勢力〔原文イタリック〕が日本プロレタリアートの先進的な層を結集して、ブルジョアジーの資本主義的支配の打倒をめざす非妥協的な階級闘争とプロレタリア独裁樹立との旗のもとに、広範な労働者大衆を統一するとは期待してまい。現実には、日本における大衆の共産主義政党は、日本労働運動の思想、組織の革命的成長にもとづいてはじめて、よりいっそう大きくなることができる。一つひとつの経済的争議は、八時間労働制、労働立法、工場委員会ならびに労働者生産統制、労働者階級の結社の自由をめざす革命的闘争に、労働者大衆を引き入れるために利用されるべきものである。労働者大衆がその解放をめざす政治闘争に引きいれられる合法的可能性はひとつたりとも軽視してはならない。

四、日本の労働者階級の最良の先進的分子すべてを統一せる、強固で一致固結した共産主義政党の結成は、日本プロレタリアートが国内において決定的な革命勢力となる第一条件である。日本の労働者階級は、一連の準備闘争なくして、その切実な利益のための日常闘争を基盤に労働者階級を階級的な非妥協的精神で教育することなくして、権力獲得など期待できまい。プロレタリア独裁、軍事的に金権的天皇制のソヴェト権力への交代、共産主義政党の目標とは、これである。これを達成するには、一連の階級闘争において、元老、軍部、財閥の威力を粉碎する必要がある。農民大衆の支援なくして、これは実行できまい。

前世紀前半のイギリスのチャーチスト運動の経験、ロシアの一九〇五—〇七年の革命、一九一七年の十月革命が教えてくれるところでは、工業発展の急テンポが念頭にあり、半プロレタリア分子とみずからとのなお絶ちがたい結びつきに依拠しているプロレタリアートは、みずからの旗のもとに都市と農村のきわめて広範な勤労者諸階層を統一しうるものである。

一九一六年、一九一八年の調査によれば、日本の農業人口〔耕作に従事する農家戸数〕の四%の二万九八五九戸が七・八五〔七・三五〕エーカー〔三町〕以上の土地を自家用に有し〔耕作し〕、二六・五%の一四四万九三四〇〔一四五万〇四五〇〕戸

が四・九〇エーカー余〔二・四五エーカー以上、七・三五エーカー未満、すなわち一町以上、三町未満〕、六九・四〔六九・五〕%の三六九万六九六八〔三七九万六九六八〕戸が二・四五エーカー〔一町〕未満の土地を自家用益に有し〔耕作し〕ている。

一二五・五エーカー〔五〇町〕以上の小作地を所有する大地主は〔耕地所有者総数の〕〇・〇七%、三四九五戸にすぎない。（訳注3） 零細小作人、半日傭農が小作条件改善をめざしてたかう組合を結成し、これらが労働組合と結びつこうとしていることは、日本の農民が、革命的爆発にさいしては第三者的な傍観者にとどまるものではないという確証である。したがって、労働者階級は、革命的

大衆運動の指導者、領袖の役割を引きうけなければならない。広範な勤労大衆にとっては、ブルジョア民主主義の諸スローガンがなお過ぎ去った段階のものではなく、日本国内の階級勢力関係が急進的「民主主義的変革」の成功を期待させてくれるだけに、共産党員は、過渡的性格の当面のみずからの要求として、次のようなものをかかげずにはおれない。（一）政治制度の完全な民主化、（二）自家労働による耕作農民への交付用益をとまう土地国有化、（三）労働者生産統制のもとでの巨大鉱工業部門の国有化、（四）植民地、植民地的勢力圏の解放。共産党員は、これらとあわせて、革命闘争、革命的大衆統制の機関としてのソヴェト

のスローガンを宣伝しなければならない。共産党員は、ブルジョア諸政党、協調主義的分子がプロレタリア革命に対してばかりでなく、急進的「民主主義的変革」に対しても敵対的であることを証明し、みずからの諸要求のまわりに小ブルジョアの勤労大衆を結集しつつ、ブルジョア諸政党、協調主義的分子の欺瞞を暴露しなければならぬ。

現在の状況下に、日本共産党は、労働組合、合法的労働者組織全般、軍隊・艦艇、労働者住宅街、農村における党細胞と結びついた、部門別に分かれて中央集権的である非合法的機構がなければならぬ。農村、軍隊、艦艇における活動は、プロレタリアートの無敵の進歩的運動をもつとも有効に準備するものであるだけに、この活動には、とくに注意が必要である。

訳注

1 田口は露文大会文書集のN署名論文「日本の政治情勢」で、神戸の勝田銀次郎を国民党のバトロンとしている。勝田汽船・大洋汽船社長で、船舶所有屯数が業界第四位にも達した船成金。

2 サファーフ報告「極東における植民地問題と民族解放闘争」にも、露文大会文書集六五ページ（日本国際問題研究所中国部会訳編『中国共産党史資料集』第一巻、一九七〇年刊、九四ページ）、独文大会文書集五八ページ、英文大会文書集一七二ページ（高屋・辻野共訳書二三二ページ）で同趣旨の言及があるが、片山報告「日本の政治・経済情勢および労働運動」は英文一二七二ページ（訳書一七五

ページ)、独文七三ページ(片山)「反戦平和のために」一五九ページ)において一九一七年から大会当時(いたる期間)の労働者数の変動をさしおよそ二五%増と指摘する。露文一一一ページの片山論文「日本の労働運動」付表には一九一四―一九一九年の各年次の労働者数も挙示されている。明らかに、綱領の「戦時中に」という表現は、サファロフ報告のそれとともに、誤っている。

3 これらの数値は、農商務大臣官房文書課『農商務統計表』第三四次(一九一九年刊)記載の一九一七年末のものと同符節する。括弧内は『農商務統計表』に基く訂正および補足を示す。右サファロフ報告の露文六四ページ(訳書九四ページ)には、綱領のこの部分と同一の文章がみられ、独文五七ページ、英文一七一ページ(訳書三三二ページ)も、ほぼ同じである。露文大会文書集にのみ収録のサファロフ論文「極東勤労者大会」四七ページのほぼ同一の文章のうち、「一九一六年、一九一七年の調査によれば、一戸当り七・八五エーカー以上の土地……(集約的栽培のもとで)一二五・五エーカー以上の小作地……」の傍点箇所は相違する。念のために付言すれば、右片山報告の付表から、『東洋経済新報 経済年鑑』(英文標題 The Oriental Economist Year Book)一九一九年度版(片山報告の一九一六年度版は誤植)が資料源と断定されるが、右付表にも、同年鑑にも、上記の一連の誤記はない。

4 右サファロフ論文「極東勤労者大会」四七ページには、類似の論旨が次のように表現されている。「日本ではプロレタリアートだけ

が最後まで革命的にたたかうことができる。プロレタリアートのほかにただれも、このたたかいは始めることはできない。その最初の任務は、軍部、地主、財閥のプロットを解体し、打倒することにある。この中間的な革命的任務を遂行する上に必要とする、民主共和制、土地国有化、労働者生産統制のもとでの巨大鉱工業部門の国有化、植民地・植民地的『勢力圏』の解放のごとき、過渡的諸要求をめざすたたかひにおいて、プロレタリアートは、都市農村小ブルジョア階級の隊列に同盟者を見出す。」(傍点箇所は原文ではイタリック) サファロフ報告にも似た指摘があるが、高瀬の賛成討論(英文文書集一八九ページ、訳書二五四ページ)は、右の過渡的諸要求の達成がソヴェト政權樹立に随伴する可能性を認める。また、右片山論文には、普選運動放棄の称揚があり、日本共産党書記(山川を指す)夫妻刊行の機関誌『社会主義研究』の役割が特筆される。田口も、N署名論文で、ブルジョア民主主義運動を評価して憲政会・国民党の普選運動再高揚も必至としながら、尾崎行雄の「ただの議政壇上の雄弁」は人民大衆が看破しているという。帰国途次の一部代議員の間の議会主義論争なるものも、回想記にありがちな思い入れがありそうである。まして前年七月に早くもラデック、シュミヤツキーらから普選重視の説得があったかという田口の記憶には、一年後の日本共産党綱領規約特別委員会が混同されている。